

27年度版教科書つれづれ 4 「たんぽぽ」(東京書籍・小学2年)の巻

加藤 郁夫(読み研事務局長)

「たんぽぽ」は東京書籍・小学校2年(上)の説明文である。前回の光村図書「たんぽぽのちえ」とほぼ同じ位置づけの教材である。どちらもたんぽぽの生態を述べた点で共通しており、比較して検討することもおもしろい問題なのだが、それは別の機会のこととして、今回はこのコラムの趣旨から、23年度版(以下旧版)と27年度版(以下新版)の違いを見ていくこととする。

結論から述べると、今回の「たんぽぽ」に関わる改訂を私は評価する。

最初に文章の概要を示すために、構成について述べておく。

「たんぽぽ」は、「はじめ」を持たず、「中—おわり」の二部構成であり、たんぽぽが根を張り、花をつけ、実をつけ、わた毛を飛ばし、芽を出すという生態をおおすじ時間の順序で述べている。以下のような構成と私は考えている。

1～9段落 「中」

1～2段落 たんぽぽの根

3～5段落 たんぽぽの花

6～7段落 たんぽぽの実

8～9段落 たんぽぽのわた毛

10段落 「おわり」(まとめ)

先ほど私は、今回の「たんぽぽ」に関わる改訂を評価すると述べたが、その理由を以下に4点にわたって述べる。

一つ目は、文章の異同に関わってである。文章自体は旧版と新版でほとんど変わっていないのだが、変更されたところが二箇所ある。最初の箇所は7段落である。旧版は次のように書かれていた。

みが じゅくすと、くきは おき上がって、たかく のびます。

新版は次のように変わっている。

みが じゅくして たねが できると、くきは おき上がって、たかく のびます。

*下線部が変更箇所

この前の6段落に「花が しばむと、みが そだって いきます。」とあり、花が終わると、実が育っていくことが述べられている。それを受けての7段落なのだが、「たねが できる」ことを付け加えることで、実が熟すことの意味がよりはっきりとわかるようになった。細かい変更なのだが、評価したい。

二つ目は、もう一ヶ所の変更箇所である9段落に関わってである。旧版は次のように書かれていた。

わた毛が 土に おちると、わた毛に ついて いる たねが、やがて めを 出します。たんぽぽは、そこで 大きく なる ことでしょう。

新版は次のように変わっている。

わた毛が 土に おちると、わた毛に ついて いる たねが、やがて めを 出します。たんぼぼは、そこで ねを はって、そだって いきます。

*下線部が変更箇所

後の文の表現が変わっている。私が、この変更を評価する理由の一つは、「ね（根）」を出した点にある。「ねを はって」とあることで、1段落の「ねが 生きて いて」2段落の「ながい ねです」の表現につながっていくのである。芽を出し、根を張って、花を咲かせ、種を作って、わた毛を飛ばすという1段落から9段落で述べてきた、たんぼぼが「なかまを ふやしていく」ことが繰り返されている様子が思い描けるのである。

もう一つ、「大きく なる ことでしょう」は予測的な言い方で、どこか他人ごとのような感じを与える。読み手は、これまでたんぼぼに寄り添って読んできていたのに、ここでいきなり突き放されるような感じになってしまう。それに対して、「そだって いきます」の方は、断定的であり、それまでの流れとの違和感もない。私は、この表現にたんぼぼのたくましさすら感じるのだが、どうだろうか。

三つ目は、文章のレイアウトの仕方である。旧版の1段落は次のように書かれていた。（ページの下半分には、たんぼぼがたくさん咲いている写真が掲載されている。）

たんぼぼは じょうぶな 草
です。はが ふまれたり、つみ
とられたり しても、また 生
えて きます。ねが 生きて
いて、新しい はを つくり出
すのです。

新版は、同じ文章が次のようにレイアウトされている。

たんぼぼは じょうぶな
草です。はが ふまれたり、
つみとられたり しても、
また 生えて きます。ねが
生きて いて、新しい はを
つくり出すのです。

文節の途中での行ガエを一切していないのである。これは1段落だけでなく、10段落までこの方針が貫かれている。前回の光村図書の「たんぼぼのちえ」でも述べたことだが、二年生の段階では、文節ごとにスペースを入れることで、まずは文節のまとまりで言葉をしっかりとらえることができるようにしていくことが大事である。それだけに行をまたがった文節の表記は、読むことが苦手な子どもにとっては、それだけで読みにくく、文章を分かりにくくしてしまう可能性がある。繊細な配慮といえる。

四つ目は、手引きに関わってである。旧版も新版も順序に気をつけて読むことに重きをおいた手引きになっているのだが、そのあり様はかなり違っているのである。旧版のはじめに示される手引きは次のようなものである。

◆声に 出して 読もう

○くりかえし 出て くる ことばに 気を つけて、「たんぽぽ」を 声に 出して 読みましよう。

手引きは、「くりかえし 出て くる ことば」に着目させる。さらにこの後のページに「ことばの力」という囲み枠があり、その見出しが「せつめいの 文しょうを 読む」となっている。その説明の中でも「くりかえし 出て くる ことばに 気を つけて、読む。」と書かれている。つまり、旧版では「くりかえし 出て くる ことば」が読みの大きな鍵になっていたのである。

ところが新版では「くりかえし 出て くる ことば」という表現は、この「たんぽぽ」に関わったところでは一回も出てこないのである。

そもそも旧版で「くりかえし 出て くる ことば」と言っていたのは、具体的にどのような言葉を念頭に置いていたのだろうか。全部で十段落ある中で、「たんぽぽ」という言葉は最初から最後までに4回出てくる。ただ、題名が「たんぽぽ」なのだから「たんぽぽ」が繰り返し出てきているのは当たり前といえれば当たり前である。それ以外では、文章全体を通して繰り返し出てくる言葉は見当たらない。

おそらく1～2段落では「ね（根）」、3～6段落は「花」、5～7段落は「み（実）」、8～9段落は「わた毛」と、それぞれのところで何について述べられているかに着目させようとする意図ではなかったかと思われる。限られた範囲では、確かに「ね（根）」「花」「み（実）」「わた毛」といった言葉は繰り返されている。

しかし、「くりかえし 出て くる ことばに 気を つけて」と言われたら、2年生の子どもたちは、文章全体に繰り返し出てくる言葉をイメージしてしまうのではないだろうか。その意味では、わかりにくい手引きだったといえる。

新版の手引きは、はじめが次のような問いかけになっている。

●じゅんじょを たしかめながら 読もう。

▼きょうかしの 文しょうでは、たんぽぽに ついて、どんな ことが、どんな じゅんじょで せつめいされて いますか。

・下の えを 見て、書いて あった じゅんに、ばんごうを つけましよう。

この方が、順序に気をつけて読むことがはっきり示されており、子どもたちにとってもわかりやすい手引きになっているといえる。

旧版も新版も順序に気をつけて読むことに重きを置いていながらも、新版の手引きの方がよりわかりやすく、明解に示しているといえる。

付け加えていえば、先程も触れた「ことばの力」という枠囲みも旧版と新版で変わっている。旧版では「せつめいの 文しょうを 読む」となっており、その中に「くりかえし 出て くる ことばに 気を つけて、読む。」と「なにが どんな じゅんじょで 書かれて いるか かんがえながら 読む。」の二つのことが述べられていた。新版では「せつめいの じゅんじょ」のタイトルで、「何が どんな じゅんじょで 書いて あるかに 気を つけて 読みましよう。」とこの一点だけを丁寧に説明している。書かれている順序を意識することは、これ以降でも使える大事な読みの観点であり、「たんぽぽ」の文章とも合致した課題であるだけに、有効な変更といえよう。